

CELL	割付セル 単一回答	N
1	首都圏_30歳	99
2	首都圏_31歳	103
3	首都圏_32歳	103
4	首都圏_33歳	103
5	首都圏_34歳	103
6	首都圏_35歳	103
7	首都圏_36歳	103
8	首都圏_37歳	103
9	首都圏_38歳	103
10	首都圏_39歳	103
11	その他エリア_30歳	103
12	その他エリア_31歳	103
13	その他エリア_32歳	103
14	その他エリア_33歳	103
15	その他エリア_34歳	103
16	その他エリア_35歳	103
17	その他エリア_36歳	103
18	その他エリア_37歳	103
19	その他エリア_38歳	103
20	その他エリア_39歳	103
	全体	2056

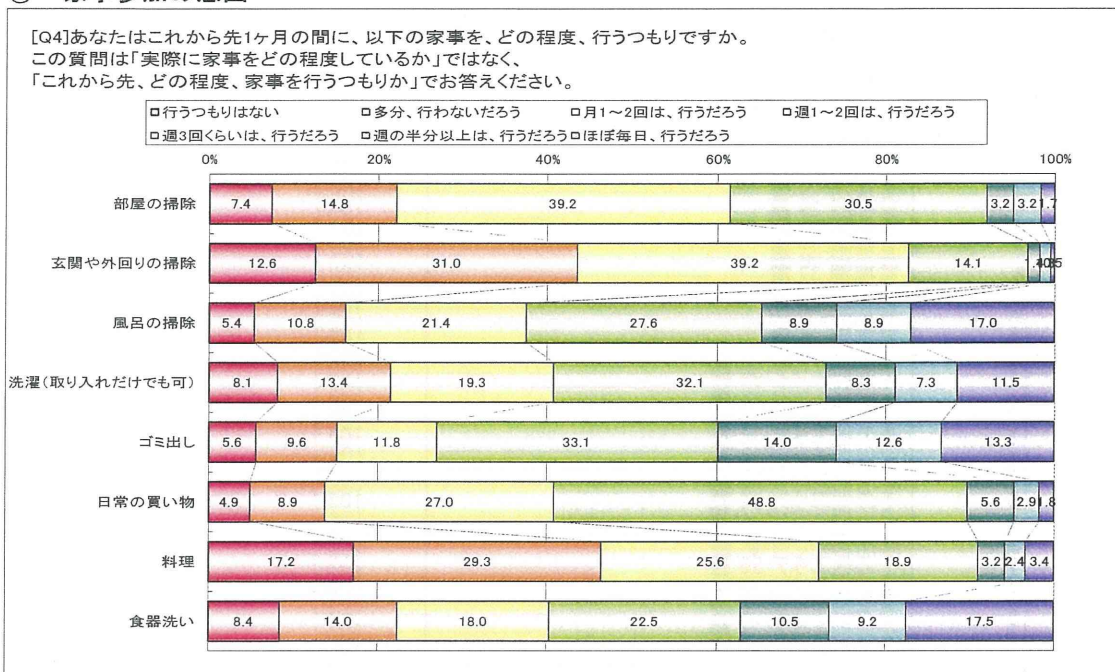
Q1	あなたの最終学歴をお知らせください。 単一回答	%
1	中学	1.0
2	高校	17.0
3	高専・短大	3.2
4	専門学校	12.8
5	大卒以上	66.0
	全体(N)	2056

Q2	午後7時前に帰宅する回数(1週間の勤務日について)をお知らせください。 単一回答	%
1	なし	44.4
2	週1回	18.0
3	週2~3回	19.6
4	ほぼ毎日	18.0
	全体(N)	2056

3	現在、ご両親(義親含む)と同居されていますか。 単一回答	%
1	同居	12.5
2	隣居・近居	11.5
3	同居していない	76.0
	全体(N)	2056

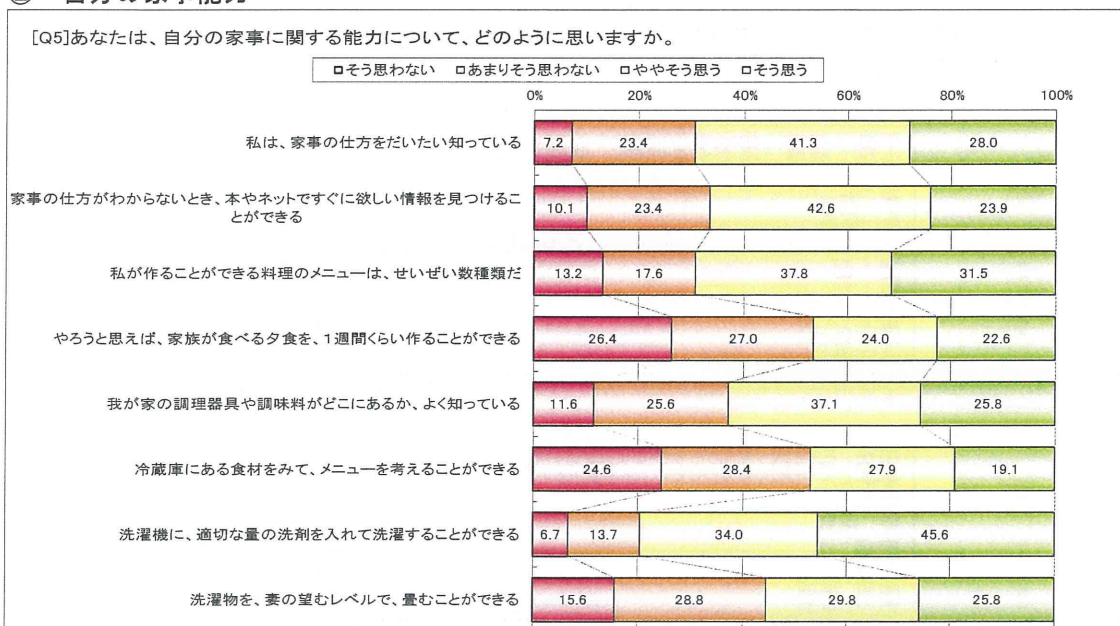
(2) 家事に関する設問

① 家事参加の意図



選択肢数を増やして実施した。30代で結婚し、すでに6歳未満の子どもがいる男性(以下、「子のいる30代夫」と略期)の家事行動に対する意図は、2パターンに分かれるようだ。1つめは「やりたくない家事」。図からも明らかのように、「玄関や外周りの掃除」と「料理」になる。新潟では高齢男性が「玄関や外周りの掃除」を担当する傾向にあるが、年齢が異なるからであろうか、その傾向は確認されなかった。その他の家事は週1以上で関与しようとしていることがわかる。

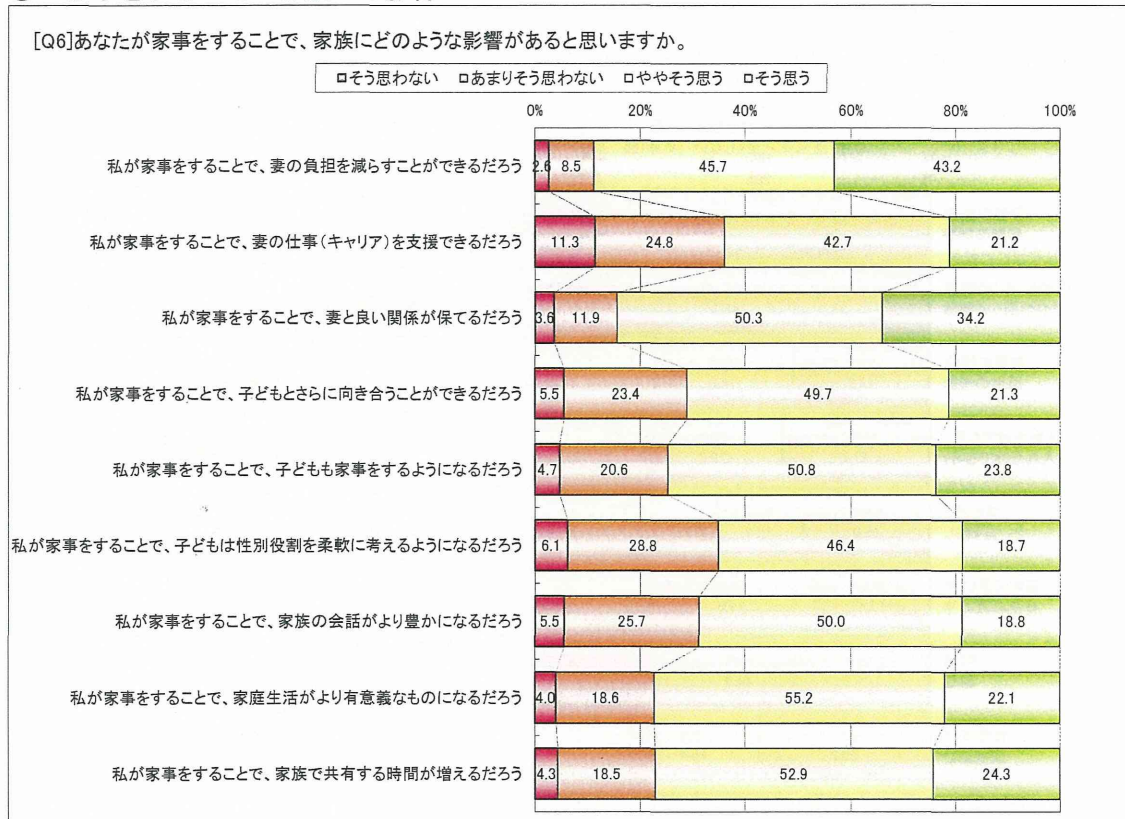
② 自分の家事能力



「家事の仕方をだいたい知って」いて、「わからない時は、本やネットでほしい情報を見つけることができる」が、「家族が食べる夕食を、1週間くらい作ること」や「冷蔵庫にある食材からメニューを考

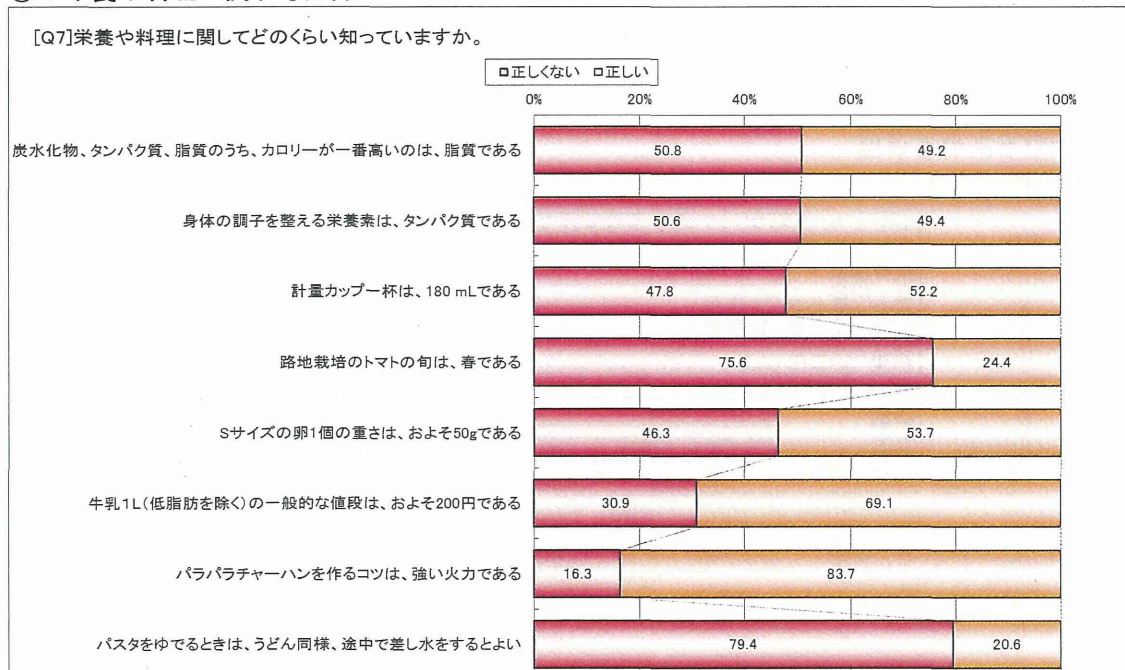
える」家事能力的には自信がないようだ。

③ 家事をすることの家族への影響



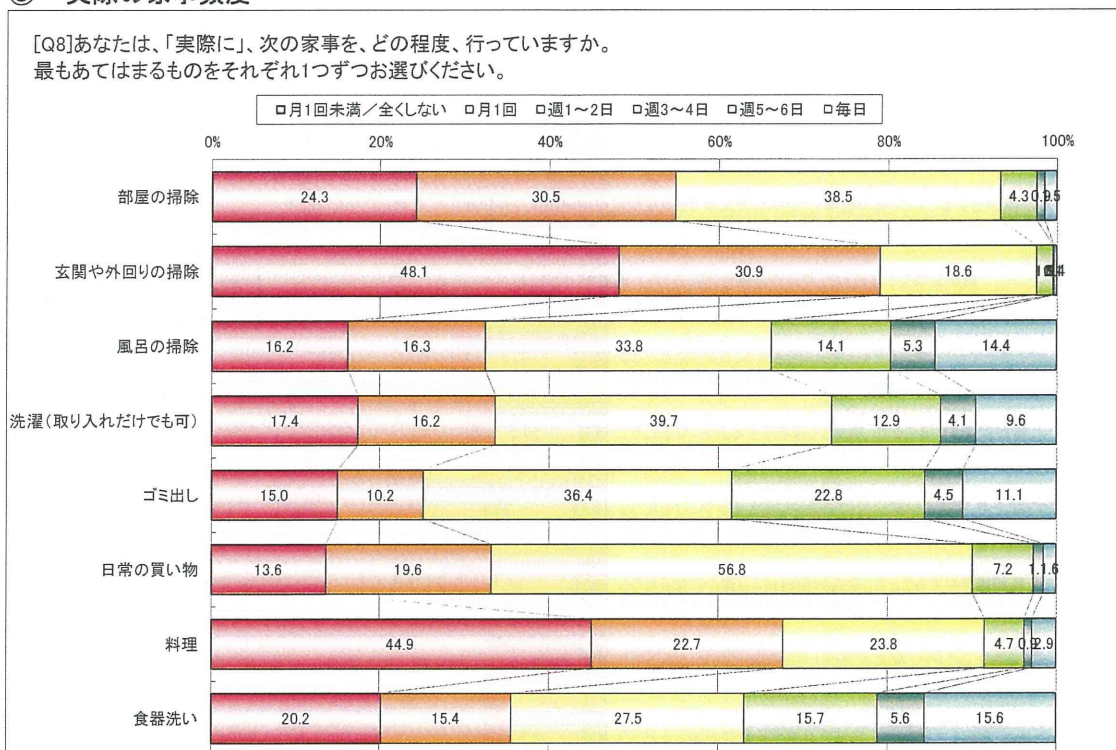
自分が家事をすることで、「妻の負担を減らし」、「妻と良い関係が保てて」、「家庭生活がより有意義なものになる」と思っている。自分をすることで「妻の仕事(キャリア)を支援している」の割合が低くなっているのは、無業の妻の「子のいる30代夫」をふくむため、と考える。

④ 栄養や料理に関する知識



意外と栄養に関する「子のいる 30 代夫」の知識は曖昧である。しかしながら、料理行動に関する知識、「パラパラチャーハンのコツ」や「差し水」の正答率が高い。

⑤ 実際の家事頻度



「子のいる 30 代夫」の実際の家事頻度(自己申告)である。週の大半(3-4 日以上)担当している家事で多いのが「風呂の掃除」、「ゴミ出し」と「食器洗い」である。逆に、ほとんどタッチしていない家事は「部屋の掃除」、「玄関や外周りの掃除」、「日常の買い物」や「料理」である。

「子のいる 30 代夫」は、週末、まとめて日常の買い物をすると予想したが、低い結果となった。これは我々が意図した「日常」は「日用品や食材」であったが、回答者はこれを「毎日の」と読み替えたのであろうか。疑問が残る。

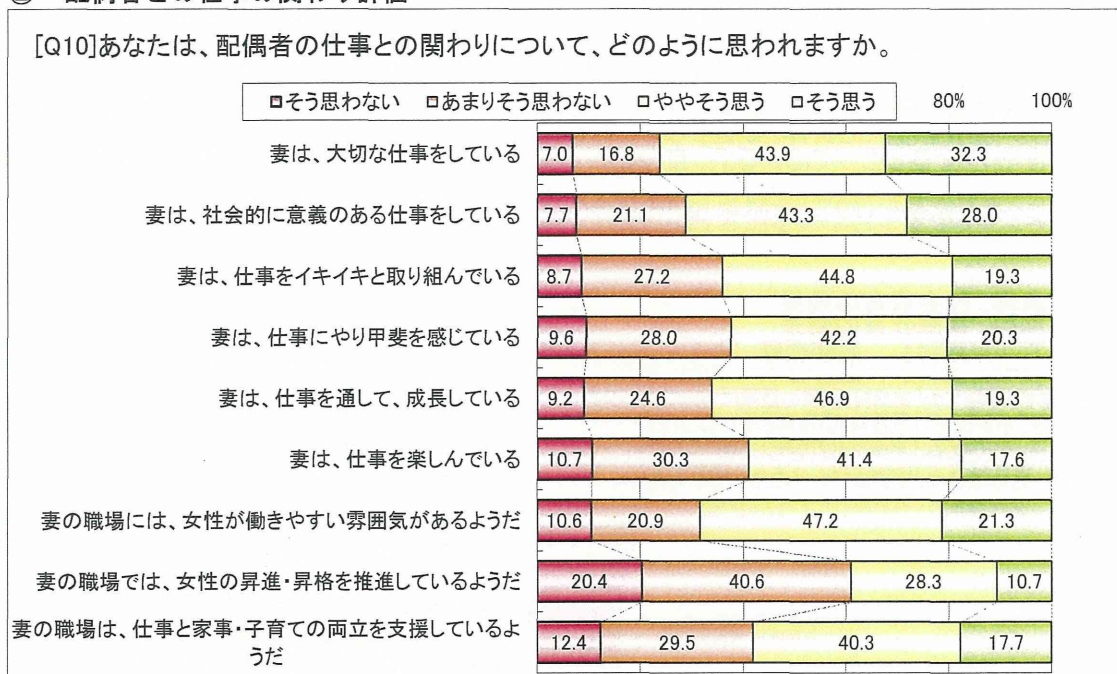
(3) 配偶者の賃金労働

① 有職かどうか

Q9	あなたの配偶者は、収入を伴う仕事をされていますか。 単一回答	%
1	常雇(雇用者・公務員)	35.5
2	派遣・パート	16.3
3	自営・家族従業者	1.1
4	内職	1.0
5	無職	46.1
	全体(N)	2056

「子のいる 30 代夫」の妻は、約半分が「無職」である。全国平均値より少し無職の割合が高い。一方で、3 人に 1 人が「常雇」である。夫は全員、民間企業の「会社員」としたが、妻は公務員や教員が多い可能性もある。

② 配偶者との仕事の関わり評価



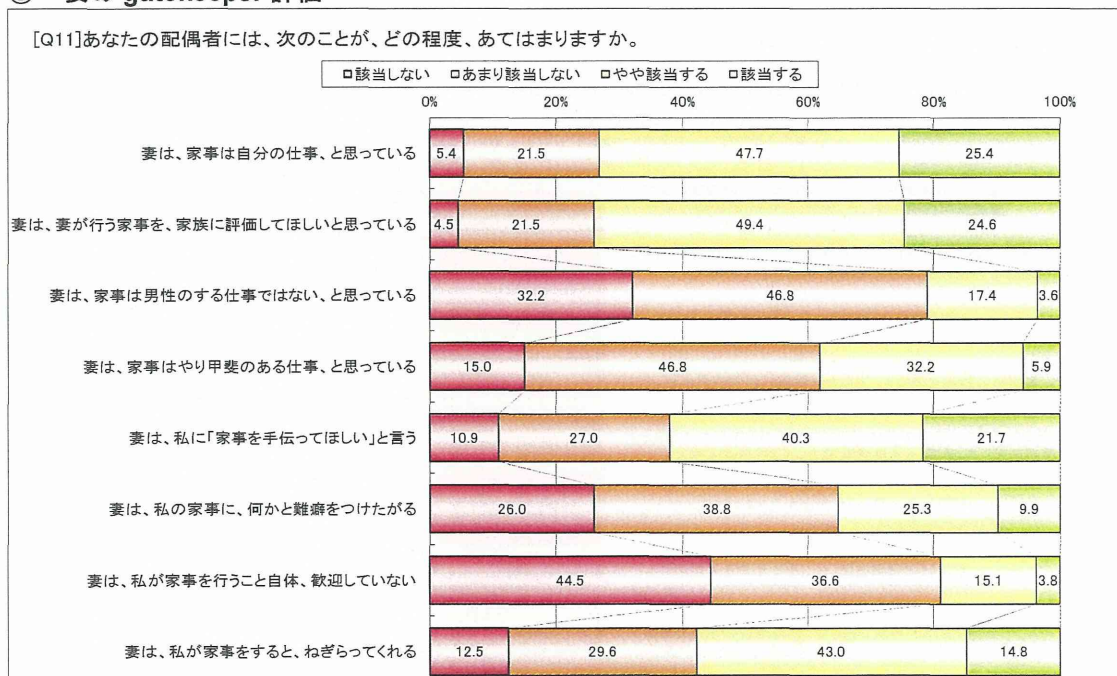
該当者のみ、回答している項目である。

「子のいる30代夫」からみた、妻の仕事関わりである。

妻は、「大切な仕事をし」、「意義ある仕事をし」、「いきいきと」、「やりがいを感じ」、「仕事を通して」時には「仕事を楽しんで」いる。

夫からみて、妻の職場の過半数は「女性の昇進・昇格を推進している」ようには思えないが、「仕事と家事・子育ての両立支援」は行っていると評価している。つまり、長く働く支援はしているが、組織内キャリアピラミッドでの垂直移動への支援は、手薄いようである。

③ 妻の gatekeeper 評価

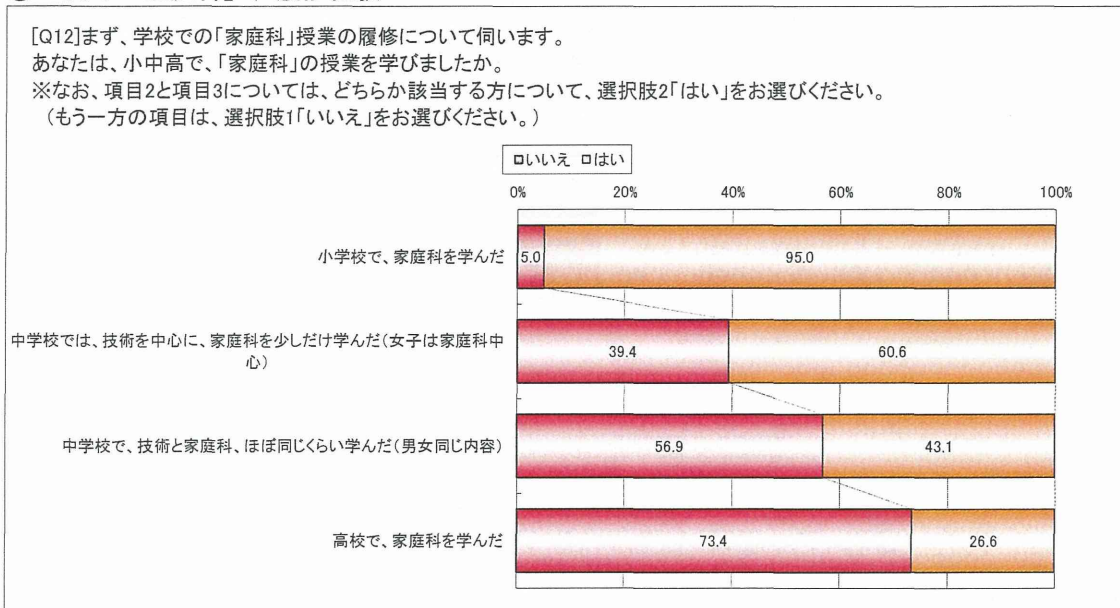


この項目は、無職妻も含まれる。

8割弱の「子のいる30代夫」は、妻が「家事は自分の仕事」、「家事を家族に評価してほしい」と思っている。同時に同じ割合で、妻は「家事は、男性のする仕事ではない」とは思っておらず、「夫である自分が家事を行うこと自体、歓迎しない」とも思っていない。つまり、「子のいる30代夫」の妻は、家事は自分の仕事と思っはいるが、自分だけの独占的な仕事とは思っておらず、それゆえ夫が台所にたったり家事を行うことを阻止 (gatekeeper) は、していない様子が窺える。

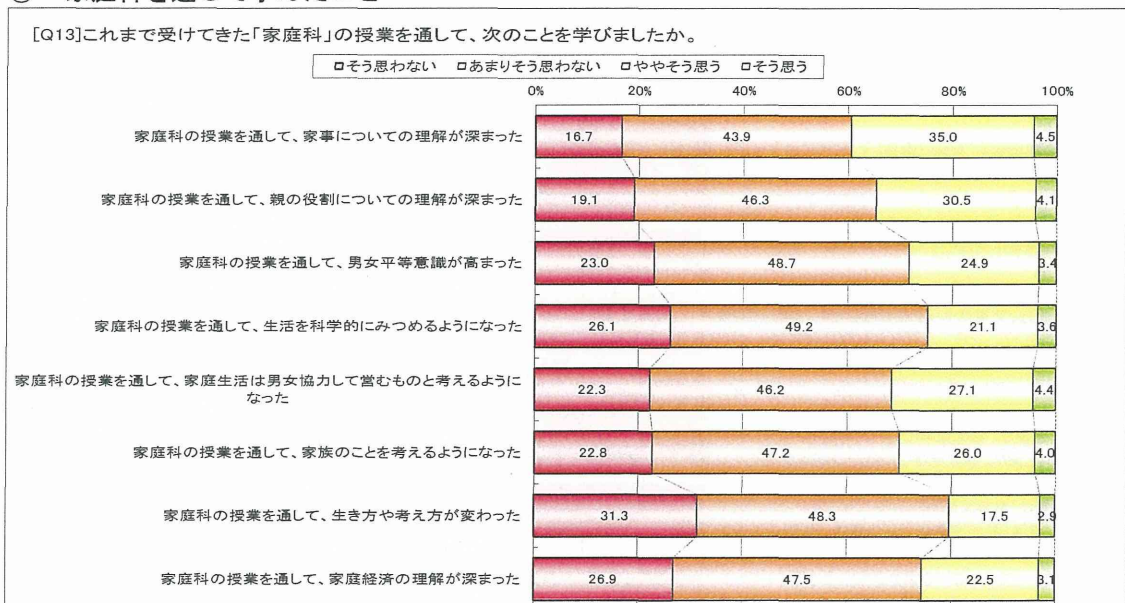
(4) 家庭科、社会教育の効果

① 夫の「家庭科」、履修経験



「子のいる30代夫」の家庭科の履修経験である。小学校は95%、中学校は「技術中心、家庭科を少しだけ学んだ」方が多く、高校で学んだのは3割に満たない。

② 家庭科を通して学んだこと



⑥ 社会教育に参加するか

Q17	では、家族や家庭生活について学ぶ場として「社会教育」が提供されたら、あなたは参加しますか。 単一回答	全体(N)	1	2	3	4
			参加しない	参加しないだろう	参加するかもしれない	参加するだろう
1	大学の公開講座	2056	38.5	40.8	19.1	1.6
2	職場での研修やセミナー	2056	31.3	30.8	29.0	8.9
3	行政や民間団体の行う市民講座やセミナー	2056	35.4	38.5	23.6	2.5
4	PTA主催の講演	2056	38.9	40.7	18.3	2.0

(5) 意識や家計管理

① 男性 gender 意識



あまり、学んだといえることはないようである。

③ 社会教育で家族・家庭生活に関する学びの経験

Q14	次に、学校以外での研修やセミナー等(以下、社会教育)について伺います。ここで社会教育とは、「大学の公開講座、職場での研修やセミナー、行政や民間団体の行う市民講座、PTA主催の講演」などをさします。あなたは、このような機会に家族や家庭生活について学んだことがありますか。 単一回答	全体(N)	1	2
			いいえ	はい
1	大学の公開講座で、家族や家庭生活について学んだ	2056	95.4	4.6
2	職場での研修やセミナーで、家族や家庭生活について学んだ	2056	94.0	6.0
3	行政や民間団体の行う市民講座やセミナーで、家族や家庭生活について学んだ	2056	94.7	5.3
4	PTA主催の講演で、家族や家庭生活について学んだ	2056	95.5	4.5

大学の講座、職場研修、市民講座やPTAなどで、家族・家庭生活に関する学びの経験はない。

④ 学んだことは何か

Q15	前問のような「社会教育」を通して、次のことを学びましたか。 単一回答	全体(N)	1	2	3	4
			そう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
1	社会教育を通して、家事についての理解が深まった	216	6.0	33.3	48.6	12.0
2	社会教育を通して、親の役割についての理解が深まった	216	5.1	25.9	53.7	15.3
3	社会教育を通して、男女平等意識が高まった	216	6.0	30.6	51.4	12.0
4	社会教育を通して、生活を科学的にみつめるようになった	216	9.3	34.7	46.8	9.3
5	社会教育を通して、家庭生活は男女協力して営むものと考えようになった	216	6.5	25.0	51.4	17.1
6	社会教育を通して、家族のことを考えるようになった	216	5.1	24.5	53.2	17.1
7	社会教育を通して、生き方や考え方が変わった	216	7.9	32.9	44.4	14.8
8	社会教育を通して、家庭経済の理解が深まった	216	6.0	29.2	51.9	13.0

⑤ 社会教育は必要か

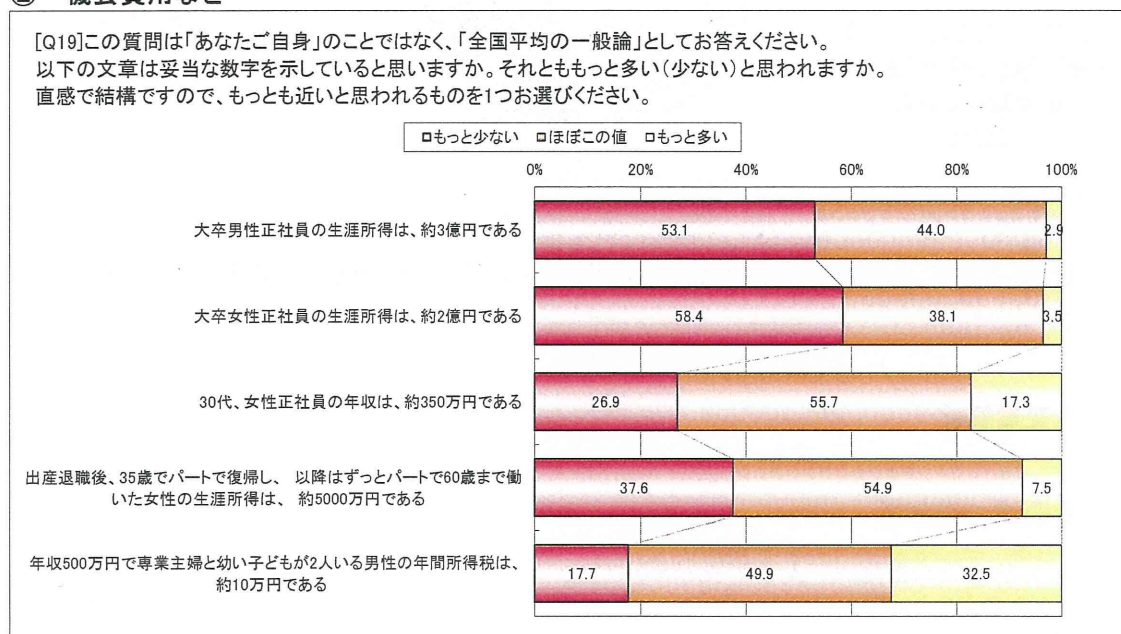
Q16	家族や家庭生活について学ぶ場として、これらのような「社会教育」は必要だと思いますか。 単一回答	全体(N)	1	2	3	4
			全く必要でない	あまり必要でない	やや必要	とても必要
1	大学の公開講座	2056	18.2	47.2	31.3	3.3
2	職場での研修やセミナー	2056	17.6	38.9	35.7	7.8
3	行政や民間団体の行う市民講座やセミナー	2056	17.4	43.4	34.7	4.4
4	PTA主催の講演	2056	21.3	48.5	27.0	3.2

9割の「子のいる30代夫」が、「一家の大黒柱は、自分」であり、「家族を養い育てるのは、自分の責任」と自負している。一家を支えるのは父親という伝統的な役割が、現代の「子のいる30代夫」にも継承されていることが確認できる。同時に、「仕事で業績を上げて、評価されたい」とか「仕事では、競争に勝ちたい」といったギラギラした闘争心や他人との競争といった面は6-7割と減少する。

「妻には、できるだけ稼いでもらいたい」、「妻には、できれば自分の意見に従ってもらいたい」「妻には、自分の習慣に合わせてほしい」、「生活の重要事項は妻ではなく自分が決めたい」や子どもに手がかかるうちは、妻に働いてほしくない」といった設問は賛否が拮抗している。

「妻が自分の思い通りにならないとイライラすることがある」が過半数を超えている。将来的な家庭内DVの発生が懸念される。

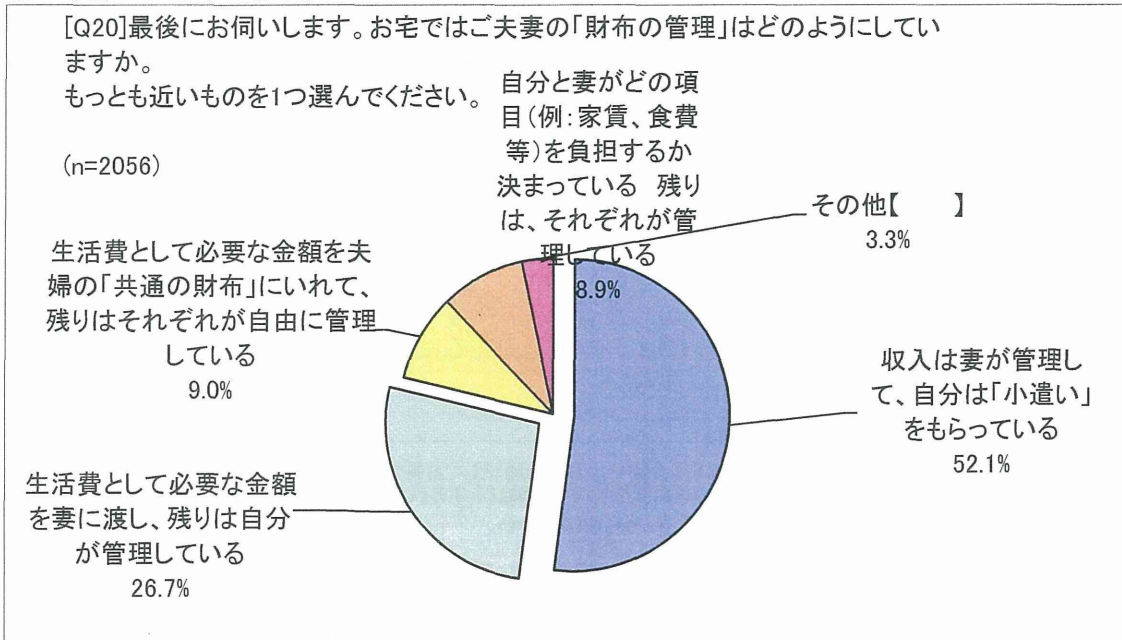
② 機会費用など



正解は、すべて「ほぼこの値」である。大卒男子が3億円と回答しているが、大卒女子になると「もっと少ない」と評価している。

この項目は、属性(学歴、妻の仕事の有無)との間の詳細な検討を踏まえる必要である。

③ 家計の「財布の管理」



「妻が管理して自分は小遣い」という割合が過半数である。その他が 3.3%あるが、その多くは「自分が管理して妻に小遣いを渡す」と自由記述をしてきていた。「夫管理・妻小遣い」の選択肢が抜けていた。

3. 多変量解析

(1) 手順:2つの分析

本節では、データを用いて多変量解析を行う。

手順は次のようである。

分析 1: 従属変数は、家事の行動意図、である。説明変数は本人領域から「家事能力」、家族領域から「妻の仕事評価」、「妻の gatekeeper」、「自分が家事をすることで家族への影響」、社会領域から「家庭科教育の効果」の 5 つである。

分析 2: 従属変数は、家事行動の頻度、である。

分析 2-1: 説明変数は、中範囲理論的変数、具体的には夫本人の gender 観、夜 7 時までの帰宅回数(頻度)と、親同居変数の 3 つである。

分析 2-2: その上で、さらに分析 1 の項目を足して行う
 枠組みを示す(図 1)。